

6 7 8 9 18 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 4

特 241

899



3

満蒙より何を  
期待すべまか

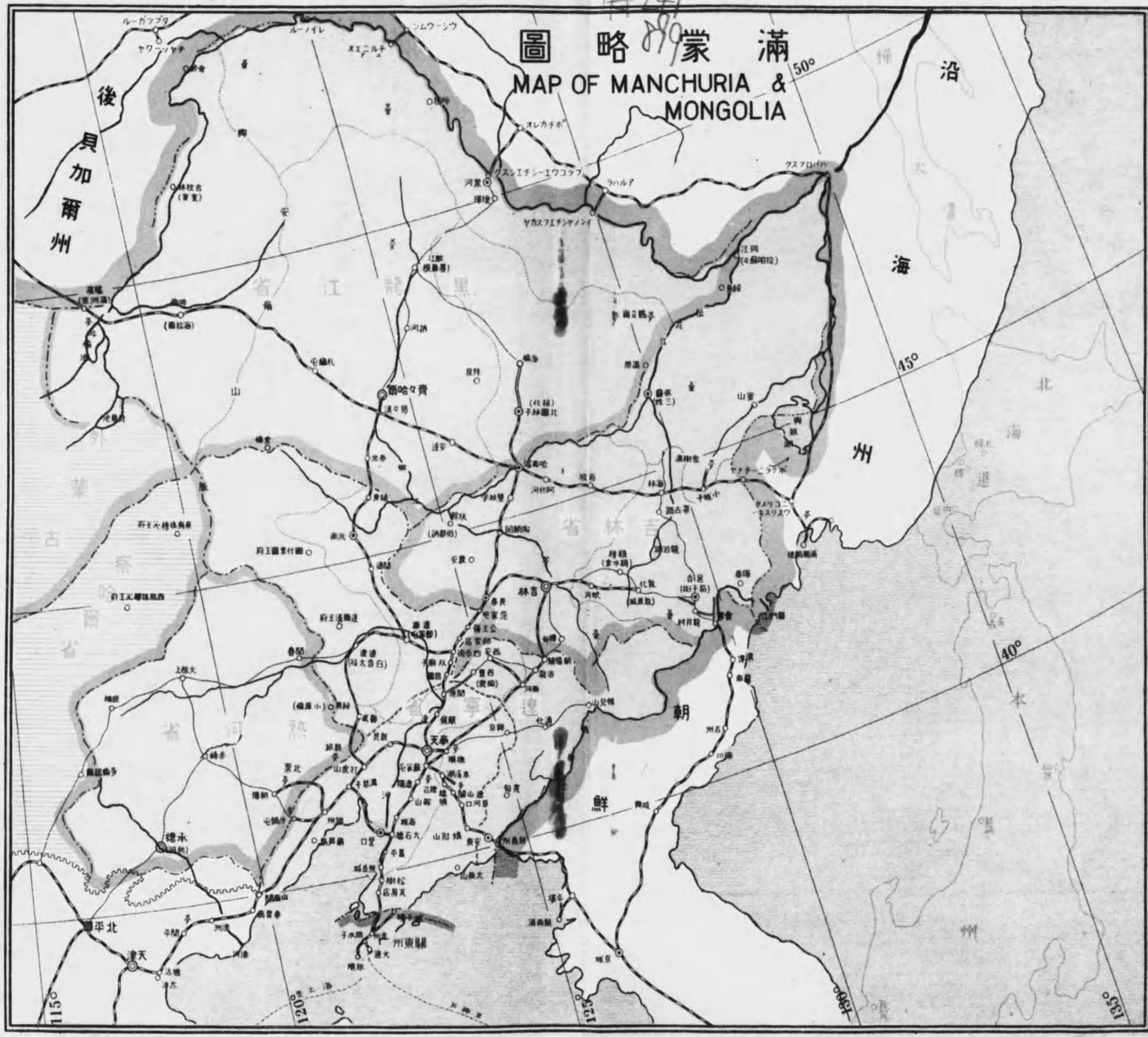
始





741

# 圖略 890 蒙 滿 MAP OF MANCHURIA & MONGOLIA





目次

はしがき.....一

第一 滿蒙の廣袤と人口——過去に於ける日滿關係.....二

一 滿蒙とは如何なる地域をいふか.....二

二 行政的區劃.....三

三 滿蒙の廣袤と人口.....四

四 南北滿洲の境界.....五

五 過去に於ける日滿關係.....七

第二 滿蒙の資源.....一〇

一 農産資源.....一〇

二 大豆と小麥.....一一

三 高粱、粟及び玉蜀黍.....一三

四 滿洲米.....一四

五 柞 蠶.....一六

六 其他農産物.....一六

七 邦人の滿蒙に於ける農業經營の可能性.....一八

八 滿蒙農産資源増殖の一方方法.....二〇

九 林産資源.....二一

一〇 供給木材の數量—附パルプ原料.....二四

一一 畜産資源.....二七

一二 畜産製造品.....二七

一三 水産資源.....三〇

一四 關東州の鹽業.....三一

一五 鑛産資源.....三三

一六 石 炭.....三五

一七 撫順炭—油母頁岩工業.....三七

發行所寄贈本





一八	滿蒙の工業生産……………	三九
一九	滿蒙資源の輸出現勢……………	四一
<b>第三 我國衣食住料問題と滿蒙の資源</b>		
一	我國食料の需給状態—米……………	四三
二	麥類の需給關係……………	四五
三	豆類の需給關係……………	四八
四	滿洲粟の朝鮮輸出……………	五一
五	肉類需給と滿蒙牛……………	五二
六	鹽の需給状態……………	五四
七	建築材の需給と滿洲材……………	五六
八	衣服料の需給状態……………	五八
九	我が燃料問題と滿蒙……………	六二
一〇	結 び……………	六四

野中時雄著

# 滿蒙より何を期待すべきか

は し が き

日本國は經濟上滿蒙より何を期待すべきか、土地か、然り。土地の商租に依りて南滿及東部內蒙古に於ける土地利用の權を有しては居るが、其實用に於て全く空權なる事既に周知の次第、且つ其體力、生活費の點に於て特殊の智識技能竝に資力なくして、單なる彼我農民對農民、牧夫對牧夫としては到底我租借地たる關東州内に於ても生活は至難、從つて土地に依存する移植民に多く光明を認め難い。然らば此地所産の天然資源は如何に。人、口を開けば、滿蒙の富源の有望を説くが果して然るか。現在我國食糧品米、小麥、大豆、獸肉類の農産不足高年二億八千萬圓、加ふるに工業原料たる農産品七億五千萬圓、其他を合して農産品輸入總額十二億、我國輸入總額の半額に當る不足高に對して果して幾許の供給能力が滿蒙にありや、其現在及將來を研究し、滿蒙資源の需要者日本の立場から見て各種資源の價値を明にし又開發增長の方法に就いて説明するのが本小冊子の目的である。



## 第一 滿蒙の廣袤と人口——過去に於ける日滿關係

### 一 滿蒙とは如何なる地域をいふか

滿蒙とは滿洲及蒙古の謂であること勿論であるが、滿洲なるもの、地域としては今日尙明確でない。滿洲は漢人に對する人種上の區別をする爲に用ゐられた名稱に過ぎない。其名稱の沿革に至つても其説種々あり、清の大祖の尊稱を滿住と謂ひ、大宗が一六三六年に國號を大清と改め、舊稱金國に代ふるに滿洲と稱したものである。然し地理的には山海關の外即ち關外、又は、法制上東三省又は東省と稱せらるゝ即ち遼寧(奉天)、吉林及黑龍江省の三省を以て滿洲の對稱と言ふべきである。滿洲は主として外國人が、滿洲朝發祥の地であり且つ滿人の多く住居せる地方であつたから、此地域を滿洲と稱するに至つたもの、様である。

蒙古も其民族の稱號を轉じて其住居の地を蒙古と稱したもので、唐の時代既に蒙古の稱號があつた、従て蒙古なる地域にも幾多の變遷のあつた事は想像するに難くない。現在の蒙古は、北緯三七度乃至五〇度、東徑八五度乃至一二五度に亘る、東西二、二九六哩、南北一、〇二五哩の尨大なる地域、面積百四十

八萬方哩の總稱であつて、内、外蒙古及額魯特<sup>オロトク</sup>蒙古の三地方とする。

本篇に滿蒙と稱するも其對稱とする處は、便宜上東三省及東部內蒙古(東四盟なる哲里木、卓索圖、昭烏達、錫林郭勒)の範圍を出でない。等しく蒙古といふも、其廣漠たる地方は未調査の處多く、且つ日本との經濟的關係に於ても、且つ重要さを有しないからである。

### 二 行政的區劃

東三省に於ては、過般の易幟以來、南京國民政府の治下諸省と同様、各省政府を置き、舊來の道を廢し省を更に縣に分ち、縣政府を置く。省政府主席委員及委員並に縣長を置いて民政を司つて居る。委員は各廳長を兼ね省に於ける産業監督助長機關は農墾廳及工商廳であり、各縣には農務會商務會等の自治産業團體がある事日本の農會又は商工會議所と異なる處がない。三省の省域には、農務總會、商務總會があり、農事試驗場と農學校とが設置せられた産業の振興を司つて居る。

軍政は邊防軍司令長官を東三省に置き、張學良之が司令長官であり、張作相、萬福麟は副司令である。

東三省縣治行政區劃は遼寧省(奉天)五十八縣政府主席臧式毅(外委員十名)、吉林省(吉林)四十二縣政府主席張作相(外委員十名)及び黑龍江省(齊々哈爾)四十三縣政府主席萬福麟(外委員十一名)によつて統治さ



れてゐる。次に特別行政區域であつた熱河都統管區には又、熱河(主席、湯玉麟)、察哈爾(主席、徐永昌)、綏遠(主席、楊愛源)の三省が置かれて何れも省政が行はるゝ様になつた。

中央政府は單に其主權を總攬してゐる。蒙古は各種族の自治に委せられ、世襲の酋長、札薩光又は喇嘛に總括せしめては居るが三省接壤地方より漸次、漢人種を植民せしめ、是等の地域は借地養民の名の下に開放せしめ漸次縣治を敷かしめて居る。

### 三 滿蒙の廣表と人口

滿蒙に於ける面積は、昭和四年滿鐵調査課の推算に據れば東三省六萬七千四百四十二方里、東部內蒙古一萬三千二百八方里計八萬三千五百方里にして全日本面積たる四萬四千三百三十八方里は東三省の約六五、七%に當つて居る。人口又正確なる統計を缺くが、筆者が大正十三年に推算せる時は東三省二千三百六十萬人なりしも昭和四年現在には二千九百二十萬人に達し約五百六十萬人の増加にして最近年約百萬人以上の増加を見てゐる。東邦內蒙古の人口に至つては四百五十萬或は五百萬と稱せらる。以上を以てすれば東三省は面積に於て我國の一倍半なるに人口は三分の一に過ぎない。

一方里當人口密度を見るに、遼寧省は青森縣(一、三〇二人)に當り、岩手縣よりは稠密であり吉林省は

北海道(四三七人)よりも密であるが、黑龍江省は我府縣に比すべきものがない。總平均(四三六六)に於ては我北海道に等しき結果を示して居る。其人口密度に於ては黑龍江省を除いては決して必しも粗なりと言ひ得ない。況んや年々北支那方面よりの植民に依つて増加しつゝある勢を以つてすれば東三省は漸次人口の抱擁力を失ふに至るであらう。

因に日本人の現勢を知るために滿洲に於ける在住日本人口數は内地人、二十一萬九千人、鮮人五十八萬九千人、計八十萬九千人である(昭和三年外務省調)

### 四 南北滿洲の境界

大正四年五月二十五日の日支條約第二條、第三條等に南滿洲及東部內蒙古なる地を以て各種の商工業上の建物を建設し又農業を經營する爲めに必要なる土地商租の權利及住居往來を認められて居るが、元來支那側には南滿洲及東部內蒙古なる地域の名稱がなく、該條約の適用範圍に就ても尙研究の餘地がある。

吾等が通俗に南滿といひ、北滿といふも其範圍に關して確然たる者がない。言ふ者も聞く者も漠然たるのみ、其解釋の區々たる者がある。今其主なる者を擧ぐれば次の如くである。

(一) 省の境界に依つて區分せんとするもの



- (イ) 北 滿……………黒龍江省(面積 三七、七七四方里)
- 南 滿……………遼寧、吉林省(同 二九、三六八方里)
- (ロ) 北 滿……………吉林、黒龍江省(同 五五、一三四方里)
- 南 滿……………遼寧省(同 一二、〇〇八方里)

何れを採用するとも、若し南北滿洲は滿洲を二分するの謂に用ゐんとするならば適當でないことは明である。

(二) 地勢を標準として區分せんとするもの

北流する松花江と、南流する遼河、鴨綠江の各々流域を以つて南北滿洲を區分せんとする者で、其分水嶺は公主嶺附近となり、洮南、長春は北滿に入るであらう。之は黒龍江省の存在を無視した區分であつて當を得た者でない。

(三) 鐵道の勢力圏に依つて區分せんとするもの

東支鐵道及南滿、吉長、四洮各鐵道の背後地を以て各々南北滿洲に區分せんとする者で、換言すれば日露兩國の勢力圏を以て兩者の區別をなさんとする説で、今日の如く露國の勢力驅逐せられ支那鐵道の建設延長せられたる時に於ては其適否を知るに苦む。

(四) 貿易系統に依る區分

大連、營口、安東の背後地を南滿としポクラニイチナヤ、滿洲里、其他北邊露領貿易市場の背後地を北滿とせんとするものである。然し、かゝる經濟的勢力に依る區分は經濟界の各種狀況に依つて刻々と變化すべきもので條約等に依つて規定すべき地域の區分法としては採用し難い。

吾人は今日に至るも南北滿洲の語を多く見聞するが、未だ明確なるものを聞かない。或は舊日露の勢力圏を基礎とし、貿易系統等經濟的勢力を參考とし、其面積に於て成る可く滿洲を兩分する處の境界を以て南北に分つのが妥當であると考へられる。故に滿蒙全書では琿春より鏡泊湖を経て、長棚と松花江の會合點を通じ嫩江、松花江の合流點を過ぎ、洮兒河より索岳爾濟山に及ぶ一線を以て南北二分するを適當とせんかと述べあるは、或は適せるものならむか。之に依れば東支鐵道の南部線の南半は當然南滿に入るべきである。本篇用ゐる處の南、北滿も假に此説に倚ることゝした。

### 五 過去に於ける日滿關係

我國が最初に滿洲と交渉のあつたのは、之を歴史に見るに繼體天皇の七年六月百濟を経て元に通じたが直接には西曆七百二十七年聖武天皇の朝、唐の屬國渤海王(滿洲)大武藝が寧遠將軍高仁義以下二十四人を



我國に派遣せしに始る。爾來渤海國との修好關係あり西曆九百二十六年渤海國の滅亡に及んで交通絶ゆ。此間滿洲特産たる毛皮を得、我國の彩帛、綾絹糸、眞綿等が輸出された。

西曆千九百年刀伊の入寇を経て文永、弘安の蒙古襲來に次で倭寇等日滿間に軍事關係があつた。我國知名の士にして滿洲に足跡を印したのは加藤清正で朝鮮より東間島に侵入した。時に西曆千五百九十二年。後徳川鎖國に依り海外交通の杜絶して、日滿間又交渉がなかつた。日清戦争により再び兩者の關係復活したのである。遼東半島の割讓、三國干涉、日露戦争と次ぎから次ぎに滿洲に交渉起り、露國の南滿に於ける權利の繼承に依つて此處に政治經濟上の日滿關係が再生しつゝ今日に及んで居る。

日本領事館が滿洲唯一の港牛莊に建設されたのは、明治九年であつたが本邦人の來住は極めて少く、明治二十四年牛莊の開港後三井物産會社は出張員を派遣し、日本郵船の定期航路開かれたが猶在住邦人は僅かに二十數人に過ぎなかつた。明治三十二年、横濱正金銀行が始めて支店を開き在留邦人も百數人となつた。當時全滿在留邦人は約千九百二名と報ぜられた。即ち旅順に五三八、哈爾濱四九五、ダルニー及大連灣三二〇等南滿千百人、北滿八百四十人の分布である。露國人は一九〇三年に既に七萬七千八百八人の在留があり、日露戦争當時は實に四十萬人の在住者が哈爾濱を中心にあつた。露國が植民のためではなく其國勢伸張のために滿洲へ四十萬の人を送つて居る事は今日、同胞が僅に二十數萬を此地に送れるに對比して

誠に注目すべきである。日露戦直後には其數六萬四千八百七十七人に減じ。現在十一萬六千六百二十六人を算する。

爾後滿洲の地は日支關係より國際的關係に移つて行つた。ハリマンの滿鐵買収事件、法庫門鐵道問題、滿洲銀行設立運動、滿洲諸鐵道の中立問題、大正二年十月には滿蒙五鐵道の敷設權の獲得、大正四年五月の日支協約同十二月、四鄭鐵道借款契約等の曲折を経て大正六年十一月の、石井ランシング協定となり滿洲の地に我が特殊地位を占むるに及び關東州及滿鐵附屬地の背後地としての今日の勢力圏を築き上げたのである。

日本が過去二十數年間に滿蒙開發の爲めに傾倒した努方と資力とは實に莫大なるものである。即ち企業投資額十四億四千萬圓と日本政府が治安維持のため及び滿鐵の地方施設並に文化開發に投じたる金額は實に三億二千萬圓以上に達し、總計十七億六千萬圓を超ゆるであらう。以て我國滿洲經營の一般を推す事が出来るのである。誠に滿蒙の今日の開發の二大要因は、一は鐵道の開設、他は日本の滿洲經營と云ふ事が出来る。



## 第二 滿蒙の資源

### 一 農産資源

滿蒙は支那本部殊に河北(直隸)山東兩省の移植地であり、住民の大部分が農業を經營して居る關係から斯地に於ける産業の大宗は農業であり、農産物の販賣取引輸送が商業交通業の主たる對照物となつて居る。更に農産物を原料とする製造工業は低廉潤澤なる勞力と豊富なる原料並に資本の投下と相俟つて特に發達の域に赴く可き氣運にある。實に滿蒙に於ける農産物は産業界の中樞なりと言ふも敢て過言では無い。其農産額は大豆三七、二四三千石、高粱三六、五六二千石、粟二八、七二六千石、玉蜀黍一二、二九三千石小麥九、八五七千石、計一二四、六八一千石である。(昭和四年滿鐵調査課調)

以上主要農産物五品のみにて既に一億二千萬石以上の生産がある。之を滿蒙全農産額に見るに一億四千七百萬石(二千三十萬噸)に達す。而して南北滿洲別に之を計算すれば、南滿の七千九百萬石に對し北滿の六千七百萬石を示し、北滿や、之に及ばない觀があるけれ共商品として有力な大豆、粟、小麥は何れも其産額南滿に勝り、人口は稀薄、地方的消費少く、且つ地味一般に南滿に比し肥沃で未墾の土壤を多く餘す

だけ北滿の農産物供給量に多くの期待を爲すべきである。滿鐵に於ても北滿農産貨物吸收に嚮心する所以は一に此處にもある。

然らば果して、幾許量の農産物が東三省より輸出し得べきかに就て、極めて大略の計算ではあるが、滿洲農民の一人當穀物消費量は平均二石九斗八升五合であるから東三省の總人口二千九百萬人の消費量を算出するに人口の三分の一を子供(消費量〇・五)残りの四割を女(消費量〇・八)として計算するに六千六百萬石、種子用四百萬石、家畜飼料其他雜消費を假に二千萬石とするも計九千萬石となり總生産額一億二千四百萬石より控除して三千四百萬石(四百九十萬噸)の剩餘を生ずる。

是れ、滿洲農産資源に對して大に期待し得る所以である。然も其穀物消費の種別を見るに、高粱五二%、粟二四%、玉蜀黍九%、大豆四%其他で、高粱、粟、玉蜀黍にて其消費量の八割五分を占めて居る。大豆小麥類の最も多く輸出せられ得る理由も亦此處に存する。

### 二 大豆と小麥

大豆と小麥とは地方にて消費せらるゝこと比較的少く、輸出農産物として相當期待せられ、工業用原料としても有望視せらるゝものである。而かも此兩者は滿洲特産物中注目すべき二大作物である。而して兩



者共に北方に其主産地を有するのは満洲の氣象と土壤との關係からであつて、大豆が既に世界的名聲を博せるに反し、小麥は其期待を將來に囑せしめられて居る。

大豆は一九〇八年三井物産會社の手に依つて初めて歐洲に試搬されてから、漸次滿洲大豆の價値が認められ、歐米に於て工業用原料として、棉實、亞麻仁實、落花生、其他と角逐しつゝ、油に粕に其需要の増加を來して居る。即ち豆粕は日本内地に於ては肥料並に飼料又は醬油原料として、歐洲に於ては専ら家畜飼料に使用せられ、豆油の用途又各種の工業に利用されてゐる事は周知の處である。

今兩者の年産額を掲ぐ(昭和四年度)

品名	南 滿		北 滿		計	
	作付面積 千町歩	産 額 千石	作付面積 千町歩	産 額 千石	作付面積 千町歩	産 額 千石
大 豆	一、六五〇	一五、〇八八	二、三三五	三三、一四五	四、〇〇五	三七、二二三
小 麥	三二六	一、五八五	一、〇九三	八、二七五	一、三〇八	九、八五七

大豆は世界産額たる、五千六百萬石の六割六分を占む。次に大豆の地方消費量を昭和四年度産額を基礎として推定するに農民食料三百四十七萬石、家畜飼料百八十萬石、種子用百六十四萬石、計六百九十一萬石である。

故に總生産額三千七百二十四萬石より之を差引く時は三千三萬石が輸出用並に油房用となり、油房原料

としては凡そ千四百五十萬石が向けられる現状であるから、結局千五百八十萬石(二百二十七萬噸)の剩餘高となる。

滿洲小麥は大豆に亞ぐ製粉原料として重要なものであるが、小麥は世界的食糧品なる爲多く世界の生産と市況に左右せられ累年増加して居る。即ち現今一千萬石以上に達してゐる。此現象は北滿黒土地帯の開發に伴つて著しきを加へると思ふ。嘗て世界的の不作に乗じ大正九年に於て大連港のみより四十三萬九千噸の輸出記録を残してゐる。尙ほ参考の爲め滿洲内に於ける需給を見るに製粉原料六百萬石、種子用九十萬石、計六百九十萬石である。今之を生産額より差引くとき四百五十五萬石(六十五萬噸)の過剰を生ずる勘定であるが、人口増加による地方製粉(磨坊)用として消費せらるゝ數量は又少からず或は百五十萬石を超過すべく、従つて出廻り數量は三百萬石を出でざるべく、滿洲全體としては近年小麥及麥粉の入超を示してゐる状態にある。

### 三 高粱、粟及び玉蜀黍

高粱、粟、玉蜀黍の三種は滿洲土着人の主要食料品で其生産の大部分が地方消費に充てられてゐる。近時粟の朝鮮向輸出が注目し値する。即ち鮮米の内地輸出の跡に滿洲粟を以つて鮮人の食糧を補充し、間接



に日本内地の食糧問題に貢献してゐるのが滿洲粟である。(朝鮮向滿洲粟の輸出數量昭和二年に於ては三百二十萬石に達した。)

高粱は年産額三千六百五十萬石、大豆と産額を上下してゐる。土人は子實を食料とし高粱酒を醸造し程は滿洲の嚴寒を凌ぐ可き燃料又は地方小工業用燃料として値も廉に、或は農民が家屋の建築材料として將た家畜飼料として萬般の用途を有し、實に滿洲農家必須の産物である。植生上、滿洲の土地に恰適の農作物である。粟又農民の食料として黃酒の原料となり、家畜の飼料として産額滿洲第三の農産物である。玉蜀黍は南滿地方に於て主として農民の食料とされ程は燃料たる事又高粱稈と同様である

是等の工業的用途としては現在、僅に酒精の原料となるのみであるが高粱稈を原料とするバルブ製造は我社中央試験所の研究に依れば木材バルブに比して有利なる採算を示し居る。たゞ原料稈を遠隔の地迄運搬するの不利は大工場設立を困難ならしめるであらう。玉蜀黍よりの澱粉製造工業は企劃せらる可き事業たるを失はぬ。油房と製粉を出でない滿洲の製造工業に是等豊富なる農産加工業を加入したい者である。現在高粱、粟、玉蜀黍共に剩餘は原料のまゝ輸出され支那、朝鮮の食料品日本内地の飼料となつて居る。

### 四 滿 洲 米

米は滿洲土着人の珍重する食料であつて、各節句、盆、正月、冠婚葬祭等のみに食用する。現在、陸稻粳百七十萬石、水稻粳、百四十萬石あり、白米として約百二十萬石、滿蒙農産資源としては特に重んずるに足りないが、將來の水田として開墾見込地五十八萬町歩乃至百萬町歩と稱せられ、此の産額一千万石以上に達すべく、陸稻栽培面積又増加を見るべきを以つて、將來注目すべき資源たるを失はぬであらう。今昭和四年度に於ける收穫高を豫想を掲ぐれば次の如くである。

品 種	作付面積(百町)		收穫高(千石)	
	南 滿	北 滿	南 滿	北 滿
水 稻	七七七	一七五	一、〇七六	一、四三三
陸 稻	八三二	一八四	一、〇七六	三二一
計		一、〇一九	一、一五二	一、七五七

南滿に於ては、奉天地方、奉海鐵道沿線及間島地方を、北滿に於ては東支東部沿線及松花江下流地方を主産地とする。

現在滿洲に於ける米の需給状態を見るに、約二百萬海關兩程の輸入超過を示して居るから、滿洲米のみを以てしては供給不足の現状であるが、支那人の米作經營者の増加と吉敦鐵道の開通に伴ひ沿線へ鮮人の進出して水田經營又盛となり生産の増加は漸次自給自足の域より更に輸出超過の状態となるのも決して遠



い將來ではないと思ふ。

### 五 柞蠶

柞蠶の支那に發見されたのは千數百年前であるが、産業の一となつたのは清朝以後で滿洲では百餘年前蓋平地方で柞蠶絲の取引が行はれた。

柞蠶は滿洲至る所の山野に産出するが就中有名なのは、蓋平、岫巖、安東、寬甸の諸縣下であつて、海城、遼陽、鳳城及復の諸縣之に次ぎ近年海龍、柳河、西豊竝に關東州内に於ても發達しつゝある。年産額は未詳であるが平均七十五億萬粒とせられ、製絲工場は安東、蓋平、海城、西豊其他に散在し其數千餘を算す。柞蠶絲の輸出又平均二萬六千擔(九百萬海關兩)以上に達し主として安東經由日本に輸出せられ輸出絹綢の原料となる。關東廳調査に依る將來柞蠶飼育可能面積は百五十二萬町歩にして遼寧省は過半八十六萬町歩を占む。此産額三百八十億萬粒となる。將來有望の産業の一たるを失はない。

### 六 其他農産物

滿洲に於ける上述以外の農産には、大麥、小豆、黍、稗、蕎麥、燕麥、馬鈴薯等の普通作物と大麻、青

麻、煙草、胡麻、蓖麻、荏、甜菜、棉花等の工業原料たる特用作物と、熊岳城以南殊に關東州内に近時勃興して來た果樹園藝がある。何れも産額の上より見る時は論ずるに足らない上に産地は特殊の地方に限られて居る不利がある。但し關東州内に於ける果樹、棉花の栽培は有望視せらるゝ者である。

線麻の重要産地は遼寧省海盟、西豊、要安地方、蘇子河、渾河地方及び吉林省、東間島、南山地方、拉林、牡丹江上流地方で約二萬町歩に及ぶ。拉林河、松花江、呼蘭河、通肯河流域地方は何れも種實の栽培を主として居る。其産額百萬石に及ぶ。青麻又二萬町以上に於て上記地方の外遼河、嫩江、豆滿江流域を主産地とする。

煙草は、遼寧省では桓仁、開原、海龍、東豊、西豊、西安等の諸縣。吉林省では吉林、樺甸、磐石、額穆、敦化、壽安、五常、雙城、賓の諸縣。黑龍江省では呼蘭、巴彥、海倫、蘭西等の諸縣を主産地とする。今是等特用作物の産額を示せば左の如くである。

品名	作付面積	産額
線	二〇、〇〇〇町	一六、〇〇〇、〇〇〇
青麻	二二、〇〇〇—二五、七〇〇	二四、〇〇〇、〇〇〇
煙草	四四、五六〇	四三、八九九、三〇〇



### 七 邦人の滿蒙に於ける農業經營の可能性

滿蒙に於ける可耕地面積の推定は約二千餘萬町歩で、既墾地面積は滿洲に一千四百萬町歩、東部内蒙古に於て百五十萬町歩、可耕未墾地は尙八百萬町歩を残して居る。殊に黑龍江省に於ては、可耕地面積の六、七割を未開の儘に残して居る。現在年々開墾せらるゝ面積は約二十萬町歩以上といふ。若し此速度を以て開墾が進むとするならば、可耕未開墾地を開拓するに猶四十箇年を要するであらう。

然らば此の廣大な未墾地の開拓に邦人が貢献し得るや否やといふに、現在滿蒙に於ける土地に關する日本人の權利が甚だ不確實である。土地に基礎を置く農業經營に於て、其の根柢が不確實なれば此企業は成功の見込がないものと言はねばならない。併し滿洲の土地に對する日本人の權利は、大正四年五月二十五日の日支條約に於て、南滿洲土地に對する商租權が認められて居るのである。土地商租とは、三十箇年迄の長期限附で且つ無條件が更新し得べき租借である。又東部内蒙古に於ては支那國民と合辦で農業及附隨工業を經營し得るのである。然るに該條約締結後に細則の締結なく支那側としては自國の領土内に、日本人をして所有權に等しき商租を成さしむることを成可く避けんが爲めに、日支間にその細則なきに乗じて商租須知なるものを制定し商租の意義を頗る狹義に解釋し、又支那人にして日本人に土地を商租せしむる

者に種々壓迫を加へ且つ民國九年十二月二十五日商租稅則を制定して過當なる商租稅を徵收する事、事實上日本人が南滿洲に於て土地商租をなし難い状態に至つて居る。

土地の權利右の如くであるが、將來商租權の正當な解決がついたものとして或は又關東州内に於て邦人が支那農民と果して相拮抗して農業經營に成功し得るであらうか。

其の生計費を見るに、支那農民の一人當は左の如きものであつて到底吾邦移住農民の之に競ひ難きを知ることが出来る。

區 別	自作農			小作農			合計
	小	中	大	小	中	平	
食料費	四四・八三〇	四三・〇六六	四九・七四四	三四・四三四	二六・二一八	三〇・二七六	四四・〇四五
衣料費	七〇・六六	一二・三三六	九・八六七	四・三七八	一〇・八六六	七・六三三	四・〇四五
住居費	五・一〇六	六・四二六	八・九九五	四・四五四	五・五九	四・八六六	四・〇〇〇
光熱費	四・〇四五	一・一八〇	二・六二八	八・三〇六	一二・一〇六	一〇・二五六	四・〇〇〇
雜費	三・五〇〇	四・〇〇〇	四・五〇〇	三・五〇〇	四・〇〇〇	三・七五〇	三・五〇〇
合計	六四・五四九	七六・九一〇	八五・七二四	五四・九七二	五八・七五一	五六・六一二	六四・五四九

且つ其體力に於て到底支那農民に敵すべくもない上に、氣候、風土を異にするので日本農業を直に此地に移し難く多くのハンデイヤップが附せられねばならない。従つて支那農民と同様の經營法に依つて同



様の収益を擧げるに於ては到底此地に於ける農業經營は日本人には引合はないのは當然である。況んや近時の山東移民の大洪水の波がおしよせて來てゐる。

故に在來農業に勝るの収益を擧ぐるが如き農業經營を行ふことに依つて其の生活費を補ひ、機械力に依つて體力を償はねばならない。此點は農業の科學的經營法に依る外ない。或は又特殊の技工を必要とする果樹栽培の如きも推賞さるべきものであらう。従つて農業移住者が若し可能であるならば農業的學識と經驗ある者で若干の資金を用意する者でなければならぬ。此點は亞米利加邊の日本移民と其の趣を異にする處である。

土地商租權が確立せられたと假定すれば、かゝる農業者の滿蒙に於ける植民は、日本の爲めにも支那農民の啓蒙の爲めにも、是非共招致して日支兩國の開發に資せねばならない。滿鐵の資本に依つて創立せられた大連農事會社(資本金五百萬圓)は其の用意と助長より成るものであり、一百姓の招來でなくて若干の資力と知識ある農業移民計畫にある。

#### 八 滿蒙農産資源増殖の一方法

滿蒙農業の科學的經營は確に農産物の増殖法たるに相違なく、農業學校の増設を希望すると同時に、此

處に吾人の提唱せんとするは滿鐵に於ても十數年農事試驗の結果育成せる特産物の優良種苗を組織的に配附し普及せしむることである(尤も鐵道沿線には既に大豆種子を配附して相當成績を擧げてゐる)即ち中國側と協力して滿鐵に於て優良種苗の生産を彼に於て之が配附を支那官憲の手に依りてあまねく滿蒙地方に及ぼさんとするにある。若し改良された優良種子を全滿に普及せしめたとせんか、作付面積を假に現今の儘としても、收量に於て一割の増收ありとせば、大豆三百七十萬石、高粱三百六十萬石粟二百八十萬石玉蜀黍百二十萬石、小麥九十萬石の増收を得て主要穀物一千二百二十萬石の増收を得るであらう。

又現在一頭二斤の産毛より得られない蒙古在來綿羊は、同改良二回雜種を普及したとせんか、現在の二百萬石の儘としても現今の産毛四百萬斤に對して一躍千四、五百萬斤となる。斯の如く其の量に於て増加するのみならず其の質に於て改善さるゝことは誠に大なるものがある。以て優良種苗普及の効果を推すべく滿鐵に於ける苦心研究の農事試驗も結果ありといふべく、日支共同して滿蒙の農産開發に當り得るのである。

#### 九 林 産 資 源

滿洲に於ける森林地帯は北東の地方に分布し、南滿及蒙古地方は無木の地方が多い。凡そ次の七箇所で



あるが次に記する統計は又既往の調査より縮合せし者にして唯其大勢を察知する資料のみに止まる。

1 鴨綠江流域の森林——鴨綠江材

鴨綠江流域の森林、右岸は支那側、左岸は朝鮮側に屬し、安東に出廻る鴨綠江材が之であり、滿洲側の年平均伐採量は百萬石以上と推定されて居る。

區別	森林面積(町)	材積(千石)
支那側	九八〇、九三一	三六二、三三二
朝鮮側	一、八〇二、九六八	一、一七八、九二九

2 松、豆、牡丹江流域の森林——吉林材

松花江の上流々域、豆滿江及牡丹江の流域地方の森林で從來後依り吉林材として吉林に出廻るものは概して是等の地方の木材で吉敦鐵道の開通に依つて、此の地方の森林開發一層促進せらる可く、更に吉會全線の開通に依つて將來の吉林材は日本海に搬出せられ以て我國に供給せらるゝの時期も到來するであらう。我國が滿洲材を期待するのは主として此の三地方であらねばならぬ。調査濟みの面積及材積は約次の如くである。

地方系統	森林面積(町)	針葉樹	闊葉樹	計
松花江系統	一、四八六、八元	四〇一、五六一	五一〇、五三六	九〇一、一八八

豆滿江系統	八三二、五六三	一六二、七〇〇	二七二、三三四	四三三、五九四
牡丹江系統	六三四、九六六	三二一、九三〇	二〇九、〇一六	四三〇、九四六
合計	二、九〇四、三六八	七五五、八一三	九八一、七七六	一、七五七、五八八

3 東支鐵道沿線の森林

東支鐵道東部沿線、賓、同賓、寧安、穆稜、東寧の五縣に跨る區域で、鐵道開通前は一帶の密林にして鐵道工事測量にさへ困難を來し、俗に樹海と稱せられた。又西部沿線は興安嶺の森林で其位置の關係より密度東部沿線地方に比すべくも無いが日支露三國合辦の札免公司は此内にある。前二者が水運に依つて搬出せられて居るに反し、本地域は多く鐵道に依り、伐採權は多く露人の手に在つて多くの引込線を有して居る。

地方別	森林面積(町)	材積(千石)
東部沿線	二、六五一、〇六二	九二四、六五二
西部沿線	二、〇六七、三〇〇	五〇〇、〇〇〇
合計	四、四〇六、一一八	一、四二四、七五二

4 三姓地方の森林

吉林省の東北部を占め、松花江、黑龍江、烏蘇里江の間に狹まれた地域、方正、依蘭、樺川、富錦、同



江、綏遠、虎林及密山の諸縣に跨る地方の總數で區域廣大、材積も亦多いが、交通不便で水流の關係上哈爾濱其他南滿に關係を有するものが多くない。(森林面積五、二九〇、九九二町、材積二、六一八、六〇一石に達す)

滿洲森林に存する樹種中既に知られたもの約三百種以上に及ぶが、普通八十餘種であつて最も多いのは針葉樹で、テウセンマツ(紅松)、テウセンタウヒ(魚鱗松)、テウセンモミ(杉松)、タウシラベ(臭松)ダフリカカラマツ(落葉松、黃花松)等、闊葉樹ではカウライミズナラ(柞木)シラカンバ(樺木)、アムールシナノキ(段木)、ヤチダモ(水曲柳)、ハルニレ(榆木)、ドロノキ(楊木)等である。

是等の混歩歩合を見るに、針葉樹が四割、闊葉樹六割であり、テウセンマツは針葉樹中の過半を占め、モミ、タウヒ類が三割を占め、闊葉樹ではナラ、カシハ、シナノキ、ハルニレ、ヤチダモ、ヤマナラシ、ドロノキ等約七割を占めて居る。

### 一〇 供給木材の數量——附パルプ原料

滿洲に於て調査せられた總森林蓄積材料は前述の通り六十一億六千二百萬石で、滿蒙の面積の大に比して甚だ少い。全日本(樺太、朝鮮、臺灣を含む)の蓄積材量百一億六千三百萬石に比して其半にも満たな

い。決して豊富なる林産資源と言ふ事が出来ない。たゞ交通不通なのと、地方需要の大ならざるに由り其伐採數量の少きため、若し假に現在の儘の伐採數量とするならば、其の生命は比較的長く保ち得るであらう。此點に期待がかけられてゐる。

現在に於ける供給數量は、確實なることを知り難いが、年額大約鴨綠江材(百三十萬石——二百二十萬石)、吉林材(五十萬石——百萬石)、間島及琿春材(二十萬石——五十萬石)、北滿材(百三十萬石——百七十萬石)、合計三百三十萬石——五百四十萬石である。

之等は主として建築材、枕木、柞木、棺材等に利用せられて居る。嘗て新義州に王子製紙の朝鮮分工場安東に鴨綠江製紙會社が木材パルプ工業を營んだことがあるが、目下の木材では廉價なる輸入パルプには到底生産引合はざる爲め何れも休業して居て、斯業の前途は容易に樂觀し難いものがある。

滿洲の林産は前述の如く蓄積材量に於て豊富でない上に、其の出材量も亦少く、甚だ振はず、之が爲めには森林鐵道を敷設して出材を容易ならしむる一方、林政の實を擧げしめて逐年荒廢に傾く森林保護の方途に出でなければならぬのである。

次に林産工業の内パルプ製造は滿蒙並に日本に於ける製紙原料の需給上必要なる企業で、嘗て操業せられたことは前述の通であるが今將來の爲めに筆者が推算せるパルプ用木材の蓄積量を掲げて本項を終る。



原料木材の樹種 テウセンモミ、テウセンタウヒ、タウシラベ、バルブ用としての造材蓄積量は鴨綠江材(一七、二四二、八〇〇石)、吉林材(五一、一七七、八五〇石)、北滿材(七、六六八、六八九石)、三姓材(六三、三二五、七七八石)、合計一三九、四一五、七一七石である。

一一 畜産資源

滿蒙の畜産業は頗る幼稚な域にあつて、東三省では牛、馬、騾等の大動物は主として農家の役用であり羊、豚、鶏等の小動物は自家食肉用の爲めに農場の廢棄物を以て飼養せらるゝに過ぎない。従つて畜産として世人の期待すべきものは至つて少い。之に反し東部内蒙及其他蒙古に於て農耕を営み難い地方にあつては、住民は主として遊牧的生活をなし、多量の畜産はあるが其牧畜の方法は原始的の域を脱せず、世界畜産界の長足の進歩の影響を受くること殆んどなく、加ふるに交通の便開けず、生産物の搬出又至難等其將來には相當期待すべきものがあつても現在の畜産資源としては地域の廣漠なのに比し其の乏しきを知る。滿蒙家畜の頭數に至つては、其調査區々であつて何れを眞とすべきやに惑はざるを得ないが、今調査課の推定せる昭和四年度の概數を擧ぐれば次の如くである。

牛	遼寧省	吉林省	黑龍江省	計	東部内蒙古	外蒙古
	五九	四二	六五	一五八	一一二	一〇〇

馬	六六	七三	一〇三	二四二	八一	二〇〇
騾	三二	二七	一五	七四	七	一
驢	三四	八	五	四七	一〇	一
羊	四八	一八	一九四	二六〇	二〇〇	八〇〇
豚	三二九	二二七	一七九	七三五	一〇〇	一

東三省の牛馬の頭數を我日本に比するに、馬に於て東三省は百萬頭の多きを示してゐるが牛に於ては殆ど其差を認め難い。是れ蒙古人以外に支那人は乳、乳製品の利用をなさず、従つて乳肉牛の飼育少なきによる。されば牛肉の供給上より見ては滿洲は俄に有望視する譯には行かぬ。蒙古地方に於ける上掲の統計に至つては何人と雖も之が正否を論斷し難き位の不確實さである。

一二 畜産製造品

乳及乳製品に於ては在滿外國人が之を利用してゐる外、蒙古人が獨特の方法に依つて各種の乳製品を利用するのみで商品的利用は殆どない。

肉製品に就ても同様で東支沿線に於て露國人がハム、腸詰を製造してゐるのと南滿、大連、普蘭店其他に僅に肉製品の工場を見るのみで擧ぐるべきものがない。



今肉に就て見るに、蒙古系統の牛は特に肥體するのでなければ山東牛にも劣るは勿論、内地牛に比し遙に其食味が劣る。精肉歩合は必ずしも内地牛や山東牛に比して遜色あるものではないが、蒙古では牛は乳用を主とし肉を副とせる關係上肉用として臭好でないから、其使用用途に應じて相當すべきである。在來豚は又其體格悪く一頭の肉量亦少く、滿洲豚中型種は體重二十貫内外で殆ど地方消費に充てられて居る。畜産製品中最も有望なのは毛及毛製品である。毛の内其主なるものは羊毛であつて、東三省に於て百萬斤、東部内蒙古三百萬斤、其他外蒙古百萬斤、合計四百萬斤の産毛があると見られ全支那産毛四千五百萬斤の約一割八分に相當して居るが、羊毛の品質は良好でない。濠洲産毛等に混じて製絨するか又は絨氈用となし得るに過ぎない。羊毛は今日尙殆ど我國に利用せられて居ない。

豚毛は滿蒙に於て約三百萬斤、内豚鬃の輸出は百萬斤内外を算して居る。主として刷毛用として雜毛は充填用等に供せられる。此の外馬毛及馬鬃の年産は約九十萬斤、駱駝毛若干、牛毛百六十五萬斤があり以上是等の諸毛は毛製品として當地に於て毛氈、緞通等に製せられて販賣せらるゝ外其儘輸出せられて居る。

皮革には牛皮、馬皮、羊皮、豚皮等がある。品質下等であるが産額は多い。滿蒙の地は支那に於ける高級毛皮の産地で鼯皮、栗鼠皮、狐皮、砂狐皮、貂皮、タラバカン皮、狸皮、犬皮、猫皮、仔羊、山羊皮が

主なるもので、以上東三省に於て一千四百萬枚と稱せられて居る。實に全支那輸出額の半以上は滿蒙産品である。

羊腸、豚腸、牛腸等の獸腸類は主として米、獨、英等に輸出されてゐるが、食用、運動具用、飛行船氣囊用等の材料となるが蒙古人の如き未だ放棄するものあり我等の開拓し得べき資源たるを失はない。

昭和四年度に於ける滿蒙畜産品の輸移出額を大連、營口、安東(以上南滿)滿洲里、綏芬河、松花江對露、(以上北滿)に就いて見るに次の如くである。

品 別	南 滿		北 滿		合 計
	南 滿	北 滿	南 滿	北 滿	
豚 毛	二、六〇三、八六六	—	—	—	二、六〇三、八六六
羊 毛	二、二八〇、八〇一	四三、四四三	—	—	二、三二四、二四四
其 他	一、一二三、四二六	—	—	—	一、一二三、四二六
皮	九九八、九四〇	一八、六九八	—	—	一、〇一七、六三八
角	—	—	—	—	—
獸 骨	四、一五一	—	—	—	四、一五一
家 畜	七一九、四〇二	—	—	—	七一九、四〇二
脂	三五六、一〇九	—	—	—	三五六、一〇九
卵	二四、一八〇	—	—	—	二四、一八〇
雞	—	—	六三六	—	六三六
					二九
					九五三



獸	一三八、八二八	一三八、八二八
毛	五、九七八、三四三	六、五四八、四八八
皮	五七〇、一四五	

畜産市場としては奉天及び天津を大市場として哈爾濱（海拉爾、滿洲里、齊々哈爾）、鄭家屯（伯都訥、洮南、白音太來）、赤峰（錦州、開魯、小庫倫、朝陽、烏丹城、佳棚、林西）張家口（多倫諾爾、歸化城）等は中繼市場となつて居る。

是等畜産品竝に其加工品は、動物の品種粗悪で加工技術幼稚な上に、概して家内工業の域を脚しないので其主産物は決して優良ではない。其改良増殖は將來に期待せねばならないが、土地の廣い點での將來は注目すべきである。

### 一三 水産資源

滿蒙に於ける水産物中魚介類は、海岸線短く冬季凍結して漁業困難なると漁場面積の小なるを以て大なる生産は望み難い。滿蒙の漁業は海産と河川湖産とに分つ事を得、其海産漁獲高を見るに次の如くである。

黃海	四四四 <sup>千貫</sup>	三五一、一五〇 <sup>千貫</sup>
渤海	一六一	一、〇〇〇、〇〇〇
關東州	九、六五七	四、二九七、一八〇

其他鴨綠江、遼河、渾河等の南滿諸川よりする約三十三萬貫、松花江、牡丹江、江嫩及呼蘭河等の北滿諸川よりの約百二、三十萬貫及び湖沼よりの若干の漁獲がある。滿蒙に於ては他の産業に比し特筆すべきものが無い。到底現在並に將來に於て滿蒙三千萬人の需要に應じ難い

### 一四 關東州の鹽業

滿蒙に於ける鹽業は海水製鹽と鹽池製鹽とに分られるが、東三省に於ては專賣局制度が敷かれ、大體自給自足であつて輸出能力とてはないと見て然る可く、寛ろ輸入をしなければならぬ様にならう。之に反し滿蒙に於ける海岸線の尖端を占める關東州に於ては鹽に就て莫大なる供給力を有して居る。

元來黃海及渤海は雨少く蒸發盛なる爲め海水の鹽分濃厚で鹽業に最も適し鹽田は總て天日製鹽である。關東州に於ける鹽田面積の最も大なるは鏡子窩地方竝に普蘭店地方であつて五千七百三十餘町歩、州鹽田總面積の大部分を占めて居る。關東州内鹽田面積を地方別に擧げると次の如くである。（昭和三年末現在）

地方別	日本人鹽田面積	支那人鹽田面積	合計面積
旅順管内	九三〇・六五 <sup>町</sup>	一八五・一四 <sup>町</sup>	一一一五・七九 <sup>町</sup>
大連管内	三九・一七	四・一三	四三・二〇
金州管内	—	八一・五〇	八一・五〇



普 蘭 店 管 内	二、四〇五・七二	三六五・九四	二、七七一・六六
鏡 子 高 管 内	一、九九一・四一	九七二・三四	二、九六三・七五
合 計	五、三六八・一八	一、六〇九・〇五	六、九七六・〇二八

其生産高は年の天候に依つて豊凶常ないが、平年産額は約四億萬斤内外である。  
 日本人製鹽高二七五、〇六五、二〇〇斤、支那人製鹽高一三九、四一七、八〇〇斤、合計四一四、四八三〇〇〇斤(昭和三年)である。

次に關東州鹽の需給状態に就いて見るに總産額四億萬斤の内、州内の需要約二千萬斤で残三億八千萬斤は全部輸出可能性を有するものである。其仕向先は日本内地の約二億萬斤、朝鮮の約一億萬斤、其他樺太、沿海州へ約五千萬斤等である。

州鹽の輸移出は年々増加の傾向にあるが逐年の鹽田竣工産鹽の増加に依り尙巨額の次年持越鹽を有し販路の擴張は目下の急務である。

關東州鹽の現状既に斯くの如く多くの供給力を有してゐるが、其將來は果して如何、關東廳が大正十四年鹽田適地の位置面積、築造費、生産力、運輸状態等の調査結果は開設箇所三九、第一候補地七、四六五町歩、第二候補地二、六二九町歩、計一〇、〇九五町歩を擧げ其生産豫想を次の如く決定した。

將來の製鹽豫想高

既成鹽田全部熟成後の生産見込	五九三、〇四五、〇〇〇斤
將來開設適地全部完成後の生産見込	九〇〇、〇〇〇、〇〇〇斤
總 計	一、四九三、〇四五、〇〇〇斤

實に十五億萬斤の生産があり更に甚だ粗放的なる支那人鹽田の修理改良、將來鹽田地として干瀉地を利用するならば、以上の産額は決して過大なものとは言はれない。之を以てしても州鹽の將來を察すべきである

一五 鑛 産 資 源

滿蒙に於ける鑛産資源としては金、銀、銅、鐵、鉛及亞鉛の金屬鑛物と石炭、菱苦土鑛、白雲岩、石灰石、珪石、滑石、石棉、螢石、長石、天然曹達、岫巖石、粘土及各種石材等の非金屬鑛物を産出するが就中資源として重要なものは金、鐵、石炭、苦土鑛である。

金は殆ど砂金であつて黒龍江省の二三を除けば多くは規模小にて擧ぐるに足らず、且交通不便で採掘搬出に馬賊匪賊の患がある。この搬出には飛行機を用ふべし等稱へらるゝ所以である。産地の分布は、黒龍江省最も多く鑛區百十三と稱せられ、遼寧省五十四であつて歐洲大戰直後は年産一千數百萬圓内外に上り



しことあれど最近は約二三百萬圓と推定せらる。

銅鑛としては天寶山銀銅鑛、盤石銅鑛、皮洲哨子銅鑛が小規模に精練に従事せるのみである。滿洲に於ける鐵鑛石の埋藏量は莫大なるもので、鞍山の弓張嶺一帯を最大とする。即ち、鞍山鐵鑛（日支合辦振興無限公司）遼寧省海城縣、遼陽縣、廟兒溝鐵山（本溪湖煤鐵公司）遼寧省本溪縣、弓張嶺鐵鑛（中日官商合辦弓張嶺鐵鑛無限公司）遼寧省遼陽縣を主なるものとし、埋藏量は不明であるが莫大なるものがある。是等の原料により工業的に製鐵事業を經營して居るのは滿鐵の鞍山製鐵所（埋藏量約三億萬噸）及本溪湖煤鐵公司の二あるのみ、何れも貧鑛なのは其一大障害となつてゐるが貧鑛處理の方法が決定せられて、製鐵業に對する曙光が認められつゝあることは既に周知のことである。

即ち昭和四年度に於ては、鉄鐵年産額二十萬噸を超えた。而して年産二十八萬噸計畫の下に從來三百萬二基であつた鑛鑪に昭和五年二月五百萬噸一基を増設したが全能力を發揮する時は年額四十萬噸の出鉄を得べく、内二十四萬噸を以て鋼材二十二、三萬噸を生産せんとする鉄鋼一貫作業が計畫されてゐる。かく我國製鐵の自給自足の實現に進みつゝあるを見る。

其他鑛産には、菱苦土鑛は耐火煉瓦用として大石橋附近に殆ど無盡藏に産出せられ、東部内蒙古には天然曹達の産出を見る。

### 六 石 炭

期待の少い滿蒙鑛産資源の内にあつて、石炭のみは實に最も重要な地位を占むるものである。石炭鑛區數は其炭質の良否を論ぜざれば五十以上に及び推定總埋藏量は三十億萬噸に達す。其分布南滿二十五億北滿は五億萬噸である。

其主要なるものは新邱、撫順、札來諾兒、本溪湖の各炭坑にして何れも埋藏量一億萬噸以上あり、今昭和三年度に於ける各地方別主要炭坑の推定埋藏量及出炭量を示せば次の如くである。

地方別	炭 鑛	埋 藏 量	出 炭 量
煙 臺	尾 明 盛 山	四〇・〇〇	一五四、五〇〇
大 疍	大 疍 疍	二・八	六三、〇〇〇
復 州	復 州	三二・〇	一一〇、〇〇〇
其 他	其 他	七・二	一三五、〇〇〇
計	計	二〇・〇	一
本 溪 湖	本 溪 湖	一〇二・〇	四六二、五〇〇
牛 心 臺	牛 心 臺	一〇〇・〇	四九〇、〇〇〇
其 他	其 他	一〇〇・〇	七四、五〇〇
安 奉 線	安 奉 線	八〇・〇	二〇、〇〇〇







一億五千二百萬圓に達し營業收入八千七百萬圓、支出七千五萬圓である。  
 露天堀二、坑内堀九外に搭連坑、煙臺支礦を附屬せしめて居る。一日平均出炭高撫順は昭和三年度二萬一千八百噸(英噸)である。

因に撫順炭の特徴は揮發分多く、灰分比較的少き長所はあるが、水分の多いのは一つの缺點である。  
 撫順炭の販銷状態を見るに次の如くである。

地 方 別	昭 和 元 年			昭 和 二 年			昭 和 三 年		
	滿 洲 各 地	南 洋	支 那	滿 洲 各 地	南 洋	支 那	滿 洲 各 地	南 洋	支 那
輸 出	三〇、〇四四、五五九	二二六、一七四	一、一四一、三八一	三、三二五、八四〇	一八三、〇五〇	一、〇九二、三五九	三、五四〇、六六七	一九一、八六一	一、一三七、七一六
日 本	一、四四六、七七九	三、一九八、一四九	六二二、二七六	一、六九四、六一九	三、四〇〇、六五八	七〇三、一二六	一、八四九、四二七	三、六三三、九九二	七一一、二〇七
計	七、八八四	三、七五、九三一	六、八六五、九八四	三、六六三	七、四二九、六二四	七、八八五、八六六	九、七九八	四四五、一九〇	四六・一%
合 計	四六・六%			四五・八%			四六・一%		

即ち地方消費と輸出炭とは相半してゐる。現在に於て二百五十萬噸以上の輸出力を有してゐる。

撫順炭鑛に附記したいのは油母頁岩より採取する石油である。炭層上部に厚さ約四百五十呎の油母頁岩層あり其埋藏量約五十億萬噸、而して全層中上部の三分の二は工業原料として用ふるに足り其平均收油率は約六%である。撫順に於て油母頁岩の發見されたのは明治四十二年の頃で爾來其の利用法につき研究の結果撫順式乾餾法の完成を見た。依つて大正十五年九月、五十噸能力の實大爐一基及附屬装置を建設、試験の結果成績良好の爲め目下第一期計畫として五十噸爐八十基を以て一日四千噸乾餾工場の建設準備中であつたが昭和四年度に於て完成し既に作業を開始せるを以つて我國の燃料問題解決に貢献し得るの日も遠からずと信ず。

尙ほ右第一期計畫による一箇年の生産豫想量は重油約五萬三千噸、副産物として粗バラフィン約九千四百噸、硫安約一萬八千二百噸、骸炭約四千九百噸である。

### 一八 滿蒙の工業生産

工業原料たる天産資源、就中豊富なる農産があり、動力たる石炭は潤澤であり、加ふるに供給に不足なき低廉な努力があつて、工業地として相當有力なる企業の要件を具備して居るにも係はらず今日猶油房、製粉、柞蠶、製絲、醸造及び滿鐵經營の機械工業を除いては全く不振なのは一に資金難である。資金難の



原因として挙げらるゝ處は、滿洲工業の基礎が確立せざる時財界の不況に際會せること、金融機關の滿洲工業に對する不信用と工業以外に好投資對象を有すること、擔保物處分の困難及び販賣組織の不完全等である従つて現在、滿蒙は原料の供給地たるの域を出でない。

左に滿鐵沿線附屬地に於ける工業の昭和四年現勢を見るに工場數一、〇四五、資本金二八六、三一六、二七七圓、生産額二二二、二九五、五六五圓である。

此の中大連に於ける生産額は七千八百萬圓にして全生産額の三七%を占む。

更に滿鐵及東支沿線工業を業種別に主なる者のみに就て見るに左の如くである。(昭和三年)

業種別	工場數	資本金(金銀混計)	生産額
油房	四七二	六五、四四〇	五三、六〇一千枚
製粉	二九三	八、三五七	七一、〇四五噸
精米	五六	二二、一二五	六、〇六八千圓
紡織	四	一、三二〇	一、二二三、九一一樽
製煙	二七	二、〇六七	三、〇七二千圓(四年)
製糖	七	六〇、〇五〇	一、九三四千圓(四年)
製紙	二	二六、四七五	
製材	二	二、八〇四	
製草	二	三、〇〇〇	
製糸	四		
製板	一		
硝子			

煉瓦	業	寸	生産額
煉瓦	造	一七	一〇、五七三
煉瓦	造	二九	三六、二二六
煉瓦	造	一七	五、八七九
煉瓦	造	一七	二二七、七五九千圓
煉瓦	造	一七	三、二七一千圓
煉瓦	造	一七	一、九三九箱(一晝夜能力)

以上の諸工業の内現在に於ては油房業の外其生産品として國際的聲價を博するものが少い。試に製粉に就て見ても常に年二百萬袋以上の輸入があり到底滿洲内の需要を満すに足らず、こゝに油房業のみは主要工場數、四百七十二、昭和四年度輸出九千四百萬圓に達し寥々たる滿洲工業界にあつて獨り氣を吐いて居る。我國農牧經營上大に期待せらるゝ處である。

### 一九 滿蒙資源の輸出現勢

各種の資源の内之を總括するに、滿蒙に於て其現在又は將來に涉つて大なる供給力を有する者は大豆、石炭及鹽の三者である。

即ち最近三箇年間に於ける輸出數量は左の如くである。

年	大豆	鹽	石炭
昭和	三〇、六六三、〇三五	二、七〇五、五九五	三、七五七、三七七
元			
年			



昭和二年	三〇、一七八、二八〇	二、一九四、二八二	四、三九六、八七二
昭和三年	三二、二四二、四五八	二、六九五、三八八	四、四〇七、五四二

(備考)大豆は大連、營口、安東及浦鹽の輸出統計の合計にして豆粕は大豆に換元即豆粕一枚に要する大豆を四九五・斤とし又、大豆一噸を六石九斗六升とした。鹽は關東州鹽輸移出額、石炭は南北滿洲の總輸出額である。

此三者は滿洲特産の第一位に推すべきもので、他の農産及畜産は將來農業政策よろしきを得て指導奮勵に之れ努めるならば、土地廣く勞力豊富以て幾多の特産を生産し得べけんも然らずば其の他の資源と同様滿蒙の富源として聲を大にして稱すべき程のもの何も無いといふ方が至當であらう。

此處に於てか吾等は鐵道業者として貨物の根元を培養するの見地より、又隣國先進國の立場より支那を救けて滿蒙に於ける土地よりの各種資源の生産助長に力を注がなければならぬ。今や其農業に、牧畜に各種の産業に新政策を樹立しなければならぬ時になつて居る。徒に土人の生産に任せて之を輸送し賣買することに依つてのみ利益を享けてばかり居られないのである。かくすれば其の資源は涸渴し終るであらう。涸渴に至らずとも現在に於てさへ年の豊凶に依つら屢々吾等は防穀令に依つて穀物の省又は縣外への搬出を禁止せられて居る現狀である。

次に滿蒙資源の最近三箇年間に於ける輸出高を見るに次の如くである。

品 種	昭和二年	昭和三年	昭和四年
農 産 物	二七六、八三四、六一五 <sup>四</sup>	三六一、六三一、五八七 <sup>四</sup>	三四〇、三五九、六一五 <sup>四</sup>
工 産 物	一八四、四一二、八一〇	一七六、〇五七、〇四七	一四〇、三〇六、九七二
礦 産 物	七二、三三四、一五三	八一、一六二、六〇一	八五、一六八、八一〇
畜 産 物	一〇、二〇六、五五二	一五、三九七、三八九	一四、七二〇、一〇八
林 産 物	九、四八四、六五六	八、四六〇、七六〇	六、四九六、一三九
水 産 物	四、七六四、九八五	四、六九四、六三六	

(備考)南滿三港、琿春、龍井村、滿洲里、綏芬河の合計高を海關兩(昭和元年一・五八圓、同二年一・四四圓、同三年一・四五圓)を圓に換算した。

### 第三 我國衣食住料問題と滿蒙の資源

#### 一 我國食料の需給狀態——米

我國食糧品の主要なるものは米である。日本に於ける米の需給状態を見るに、年平均産額五千九百萬石、輸移入額千百萬石、前年度よりの持越額五百七十萬石、輸移出額九十萬石、翌三年度への繰越額六百萬石、差引消費額六千八百萬石である。



年産額平均五千九百萬石に對して消費平均六千八百萬石で其不足額九百萬石である。此の不足額は如何にして供給せられてゐるかを見るに、約一千五百萬石の生産能力ある朝鮮と、六百萬石の生産力を有する臺灣並に其他諸外國から仰いで居る。自大正十三年至昭和三年の五箇年間平均輸入高は朝鮮五百四十萬石、臺灣米二百三十萬石、外國米三、一〇六、一四六石、計九、一六八、八一二石である。

斯の如くにして漸く供給を充してゐる現状からすれば敢て不安なしとしても將來人口の増加に伴ふ消費量の増加に應ずるには或程度の反當收量の増加、耕地整理開墾等に依る一方、朝鮮臺灣の産出又増加すべきも今人口食糧問題調査委員會の資料に依れば昭和三十二年に於ては需給關係次の如く推算されて居る。

事 項	昭和二年	昭和三十二年	昭和二年を100とする増加率
人 口	六一、二七四 <small>千人</small>	八八、九八二 <small>千人</small>	一四五
米 需 要 總 量	七〇、八三三 <small>千石</small>	一一一、二二八 <small>千石</small>	一五七
生 産 高	六〇、五〇九	八四、九〇七	一四〇
朝鮮、臺灣よりの供給量	五、九九一	二五、二七〇	四二一
差 引 供 給 不 足	四、三三三	一、〇五一	二四

右に依れば三十年後に於ては、却て現在よりは米の供給に關し樂觀し得べきが如きも、人口並に我内地

生産米の増加率果して今後三十年間に既往の如き増加を來すべきやは問題とすべき外に朝鮮臺灣の供給量が今日の四倍以上に達する事は大に疑問とすべきである。人口食糧調査委員會資料の臺灣朝鮮兩總督府の調査に生産面積を現状のまゝとしての人口並に生産増加の三十年後の需給は、朝鮮に於ては約五十四萬石の不足、臺灣に於ては約八百六十八萬石の供給過剩を算出してゐるから、假に右の二倍と見る時は兩者の三十年後に於ける供給量は千五百萬石程度となる。然らば差引供給不足は約一千百萬石となり之を我殖民地以外の地より仰がねばならぬ。

滿洲産米は現在水陸兩稻にて百二十萬石にして地方消費に足りないが、開墾見込地百萬町歩（千五百萬石）に着眼せねばならぬ。三十年間に悉くの開田は困難なるべきも將來の助成策如何に依つては相當の期望をなし得べしと信ず。吾人は將來不足米の見込が前記の如く百萬石にせよ或は一千百萬石程度にせよ之を全部我勢力圈内より供給し得る事によつて我等の糧道に自信を有するものである。

### 二 麥類の需給關係

麥類は米に亞いで我國に於ける主要食糧品であるが、其需給の状態を見るに最近三箇年に於ける生産高左の如くである



年次	大麥	裸麥	小麥	合計
昭和二年	七,五九,一五五	七,三三,七〇一	六,〇五,三五五	二〇,九四三,四三一
同三年	七,六〇五,六七	七,二六,〇三三	六,三八九,二四	二一,一三〇,七五
同四年	七,二〇,〇九九	七,三三,〇七二	六,三三,四三	二〇,七六六,六五四

大正十三年乃至昭和元年三箇年平均消費量は次の如くにして

種類	消費額	生産額	差引不足
大麥	八,四九九,七四〇	八,四九一,二二二	八,五一八
裸麥	六,九八四,七九七	六,九八六,〇六三	一,二六六
小麥	一一,二七二,八一九	五,七六二,二八六	五,五一〇,五三三

用途は大麥、裸麥は飯用飼料にて八六%以上を占め、小麥は製粉六七%、醬油及味噌二三%である。其需給状態大麥、裸麥は殆んど自給自足なるも小麥に至つては約五百五十一萬石の供給不足即ち生産は消費量の半に満ざる状態である。

年平均消費額約一千万石に對し不足高五百万石、朝鮮、臺灣へは却て移出超過にして之が缺乏を悉く外國産に俟つて居る。即ち四百乃至五百万石の輸入超過である（麥粉は小麥粉に換算小麥の輸出入は頗る不同であるが前記三箇年を假に標準とした）

四六

翻つて滿洲小麥には幾許量の供給力ありやと云ふに總生産一千万石ながら現在寧ろ小麥及麥粉の輸入超過であるから之より供給を望み難い。然し吾等は、大正九年世界小麥の不作に乗じて、四十一萬四千七百一噸（二百四十八萬石）の輸出超過の事實を経験して居る。小麥作の順調に進み又小麥が南滿より北滿に適作なる等鑑みて、北滿開墾進行に伴ひ之に對し相當の期待を抱くは決して不當ではないと思ふ。

小麥は米と異つて、國際的食料品たる關係上、比較的供給が得易いものと、世界小麥の産額は現在の處供給過剩の状態であるが、地理的に日本と滿蒙とは相隣れる關係上より安價に供給せられ得る望みがあり、將來我國米作の不足を、勢ひ小麥に求むべきではないかと思ふ。此の意味に於て滿洲小麥の資源に關して吾人は最も注意を拂ふ所以である。

小麥粉を其の需給上より見るに、我國に於ては原料小麥使用高約七百五十萬石の内、内地産小麥七割に外國産三割の状態である。小麥粉の生産高約三千六百萬袋にして内地消費三千四百萬袋、粉としての輸移入をも見てゐる（尤も年に依つて輸移出超過の年もある）。

其の他小麥は醬油味噌醸造用に二百六十萬石、種子用として二十五萬石、菓子及飴三十六萬石、飼料十七萬石、雜消費三十萬石である。小麥粉の點より見ても大體に於て輸移入超過であるから、小麥を輸入して粉として輸出するといふのでないから、我國小麥需給上其の資源を何れかより求めねばならないのであ

四七



### 三 豆類の需給關係

米麥に亞いで重要なる我國食料品として豆類を擧げなければならない。豆類の用途としては主として次の如きものがある。

大豆は其七五%は味噌、醤油、一五%は製油原料、一〇%は豆腐とし其他納豆、菓子、煮豆、豆粉、綠肥用、家畜飼料、化學工業原料等であり、小豆は其九〇%迄は餡とし、飯に混用、菓子、小豆粉とせられ、菜豆、豌豆は飯に混用し副食物とし餡、味噌、醤油、罐詰にする等である。

是等各種豆類の生産額を見るに次の如きものがある。

年次	大豆	小豆
昭和元年	二、九九八、六〇六石	六七五、七九七石
同 二 年	三、二六三、一七八	八七七、一六四
同 三 年	二、九七六、九二四	七三四、九九四

大豆は産額三百萬石で、内地消費は七百八十萬石にして四百八十萬石の不足を生じ居り、小豆は八十二萬石の生産に對し消費は百三十萬石で約五十萬石を不足し、豌豆は四十萬石の生産に對し十七萬石の消費

にて二十三萬石内外の供給過剩を見て居る。蠶豆は五十萬石の生産に對し需給殆んど過不足なきもの如くである。此の大小豆の供給不足に對し、從來何處より之を仰いで居たかを統計に見るに、輸入高の半は關東州を仕出地として居る滿洲品であり、朝鮮品が之に亞いでゐる。豆類の内大豆の輸入に就て見るに次の如くである。

#### 大豆の輸入

年次	支那	關東州	露領亞細亞	其他諸國	合計
大正十四年	五三、四〇六石	二、六三、二九三石	二〇九、六九九石	二五七石	三、三三、六六六石
昭和元年	八四七、六五五	一、三六、九五五	七七九、五八五	五七七	三、二六四、七四
同 二 年	九九五、八八	一、六九、六六九	四五九、一九五	—	三、〇八五、四六

#### 大豆の移入

年次	朝鮮	臺灣	合計
大正十四年	九八六、三八五石	四、五三九石	九九〇、九二四石
昭和元年	一、三九三、六三八	五、五〇六	一、三九九、一四四
同 二 年	一、四四〇、五二五	五、七二一	一、四四六、七七八

即ち日本に於ける大豆の總消費七百八十一萬石に對する國內供給不足高は其半額に達し之は輸入及移入



によつて補はれてゐるのである。小豆も同様其不足分の供給を九割は支那及滿洲に受け、残りを朝鮮に仰いで居る。

滿蒙に於ける大豆、小豆は既に前項に記した通り、我國の供給國として充分なる期待を之に置くことが出来ると思ふ。

更に之を大豆粕に就て見るも、我國生産高は最近五箇年間(大正十三年乃至昭和三年)に於て二十三萬噸乃至二十九萬噸であり、之が消費百六十四萬噸乃至百七十一萬噸に達し其供給不足は殆んど之を、全部滿洲に仰いで居る。

滿洲に於ける昭和四年末油房數は四七二、一日生産能力、豆粕、五十七萬枚(一萬七千噸)豆油二百八十八萬斤を有するも近時の原料大豆輸出激増の結果其生産は僅に五千二百萬枚即ち百五十七萬噸に減じた。

豆粕は日本に於ける需要は、近年肥料としては硫酸に壓迫せられ其販路の上に減退を示しつつ、はあるが猶有用なる肥料としての地位を俄に失はず更に家畜飼料として又醬油釀造原料として新販路を開拓しつつ、あるので我國の食糧問題上直接間接に貢献してゐる。其資源の滿洲に對する期待も大なるものがあるべきである。

#### 四 滿蒙粟の朝鮮輸出

朝鮮殊に北鮮地方農民は、農作の不良なると共に、高價なる米を販賣輪移出して之に代ふるに滿洲粟を輸入して食糧とするの傾向を生じ來り、近年其輸入の上に著しい増加を見てゐる。此結果日本内地への米穀の供給増加を來し我國食糧問題上滿洲粟は重大なる任務を有するに至つたのである。昭和二年度に於ては全滿輸出粟は六、五五三、一二〇擔、三一、三九七、九七八海關兩、内朝鮮向輸出は五、七二二、一六一擔、二八、六〇三、〇三五海關兩にして總額の數量に於て八七・三%、價格に於て九一・一%を占めて居る。而して朝鮮輸出の大部分が安東經由である。

猶滿洲粟の朝鮮輸入に就いて最近三箇年の趨勢を見るに次の如く漸増を示して居る。

年	次	數量	金額
昭和	元年	五、二九六、五五六	三七、二〇七、四八五
同	二年	六、〇五九、三一五	四三、一二九、六一六
同	三年	四、七五一、七六三	三二、四九七、〇四四

粟が滿洲農産物中産額に於て第三位を占め一千八百七十萬石に達し、豊富なる源資をなしつつあることは前項に於て既に述べた處である。



五 肉類需給と滿蒙牛

我國に於ける肉類の消費量は最近農林省畜産局調査に依るに一人一箇年六五八匁で英國の一五貫七八〇匁、米國の一貫七八八匁に比べると遙かに僅少であるが近年其需要は益々増加の傾向を示しつつある。最近三年間に於ける其屠殺頭數を見るも

年次	成牛		犢		馬		豚	
	昭和元年	昭和二年	昭和元年	昭和二年	昭和元年	昭和二年	昭和元年	昭和二年
同	二七九、四〇五	二八三、七三三	三三、三四五	三三、七四一	七四、一五四	五九七、二六四	—	—
同	—	—	—	—	—	—	—	—
同	—	—	—	—	—	—	—	—
同	—	—	—	—	—	—	—	—

昭和三年に於ける其價格成牛及犢にて五千四百九萬二千四百六十圓、馬は五百九十四萬九千八百八十七圓豚の二千四百四十萬七千四百二十二圓、合計八千四百四十四萬八千六百八十九圓に達して居る。

牛肉のみに就て見るに大正元年には二十三萬五千頭内外であつたが大正十三年には最高三十一萬八千五百三十頭に達せしも昭和三年には三十三萬五千四十六頭に増加せるも大正十三年に比し著しき増加なし。之れ主として屠肉の輸移入數量増加せる爲めである。今最近三箇年間に於ける輸入別數量を示せば次の如くである。

支那	昭和二年		昭和三年		昭和四年	
	百斤	千円	百斤	千円	百斤	千円
支那	二六〇、四四二	七、九六一	三三九、二二八	六、九七一	三三八、〇五三	七、一五七
濠洲	一六、四九一	三五七	三六、一六〇	八四三	四三、七九三	一、〇六九
關東州	一七、三二二	四七六	一〇、四五八	二七五	一八、二六八	四八一
其他	一五、八三三	四〇九	二、三三八	空	—	—
計	三〇九、九七七	七、九六一	三七八、〇六四	六、九七二	二九二、一四四	七、一五七

支那	昭和二年	昭和三年	昭和四年
支那	六〇、〇〇〇頭内外	—	—
山東	—	—	—
朝鮮	—	—	—
濠洲	—	—	—
加奈陀	—	—	—
滿蒙	—	—	—
計	—	—	—

我國に於ける輸移入數量は消費量の増加と冷蔵装置の發達により著しく増加の傾向を示してゐる。我國牛肉の需要は一箇年約四十萬頭内外で其内約四割内外が海外から輸移入さるゝ現状にある。其供給状態は次の如くである。



山東及朝鮮は我國牛肉供給地としても最も重要な地位を占めて居る。一方日本内地の産牛は其の數の増加少く、日本の消費に對し内地牛のみでは、到底間に合はぬ状態である。日本に於ける牛、馬、豚の數は左の如くである。

年次	牛	馬	豚
昭和元年	一、四六五、一四九	一、四八六、四五三	六二一、四六六
同 二 年	一、四七四、四〇九	一、四九四、八二三	六七七、〇六三
同 三 年	一、四八三、八〇六	一、四九四、二六九	七六三、六三八

之に對して滿蒙は如何なる状態にあるかを見るに昭和二年南滿三港から輸出した日本向家畜の輸出は一頭もないが牛肉として輸出せられたるものは一七、二七五據(一三、一一〇頭)價格十九萬三千九百六十四海關兩に達し將來激増の傾向を有す。最近調査の結果によると搬出の方法と冷蔵輸送の方法とを完備を計るならば其數量に於て相當期待すべきものがある。

現在滿蒙に於ける牛、豚は前項既に説いた通り充分豊富なるものとは云ひ得ないが其品質の改良と共に輸送機關の充實を計るに於ては我國の肉供給資源として多少の價値あるものと思はれる。

### 六 鹽の需給状態

我國に於ける鹽の生産は最近三箇年左の如くである。

年次	生産高	人口一人當生産
昭和元年	一、〇二三、五五六、三一一	一六・二
同 二 年	一、〇三一、八九七、八一五	一六・一
同 三 年	一、〇六三、一四六、三二二	一六・四

其消費量は外國に於ては十五、六斤なるも、日本人は約二十斤内外であるから、生産のみを以つては不足である。其需給關係は大體左の如くである。

區別	生産高	輸移入高	需要高
日本	十億萬斤	五億萬斤	十五億萬斤
朝鮮	一億七千萬斤	二億三千万斤	四億萬斤
臺灣	二億五千万斤	—	九千萬斤
關東州	四億萬斤	—	二千萬斤

我國不足鹽五億萬斤の供給は、臺灣鹽一億五千萬斤、關東州鹽二億五千萬斤其他諸外國鹽一億萬斤である。大正十二年以前は青島鹽の供給二億萬斤以上ありしも、輸入杜絶の結果は著しく關東州鹽の供給力を増加し來り、供給力又前項説けるが如く大なる者あるを以つて我國鹽需給上重要な地位を占むるに至つた。然も十數年後には我國の需要は二十億萬斤に達すべく、之に反し生産は現状以上に増加する事は困難



なる事情にあり、十億の不足を輸入に俟たねばならぬであらう。此點州鹽に對して意を強くするに足る者がある。

### 七 建築材の需給と滿洲材

我國に於ける林産物の總需給量は、嘗て帝國森林會の調査に依れば三億七千萬石にして需給關係に不足はないが、之は用材及燃料の總計であつて、用材は却つて供給不足である即ち平均需要量七千萬石に對し生産は左の如くである。

年次	用材産額	價格
昭和元年	四五、四五〇、四八〇	一一七、九七九
同二年	四六、七二三、八四七	一一六、三四二
同三年	四九、五九三、三二〇	一一八、九〇一

即ち不足額二千萬石の補充は樺太より一千万石、朝鮮臺灣より三十萬石、外國材一千二百萬石である。外國材の八割五分は米材、カナダ材であり西伯利亞材は約一割を占む。

最近に於ける輸入量左の如くである。

年次	數量	數量
大正十四年	七、五六四、六二一	六九、九四〇、六八八

昭和元年	昭和三年	昭和四年
一一、六四一、四八五	八七六	五三九
一二、五三八、四六二	八五九	一一、一五〇
	一二、八一〇	一〇、二七八
	二、五六〇	一、八五一
	八四、九二六	六七、三一五
	六、八八四	五、一一〇
	二、〇九一	二、五九二
	一一一、〇〇八	八八、八三七

猶木材仕出國別に見るに次の如くである。

仕出地	昭和三年	昭和四年
支那	八七六	五三九
蘭領印度	八五九	一一、一五〇
露領亞細亞	一二、八一〇	一〇、二七八
暹羅	二、五六〇	一、八五一
北米合衆國	八四、九二六	六七、三一五
加奈陀	六、八八四	五、一一〇
其他	二、〇九一	二、五九二
計	一一一、〇〇八	八八、八三七

我國の立木蓄積量は臺灣、朝鮮、樺太を加へて約百一億六千三百十七萬石と稱せられ、約滿洲の二倍に上るが、其需要の多き、勢ひ伐採高を増し現在の如き伐採を續けるならば四、五十年の需要を充すのみであるといふ。之れ其供給を輸入に仰がなければならぬ點で、供給國としての滿蒙の能力は果して如何、現狀を以てすれば年代採量は四百萬乃至五百萬石で多くは北支那、滿洲、朝鮮の需要に充てられ、日本向は極



少量に過ぎない。且つ立木蓄積材量五十億萬石に對して年伐採五百萬石足らずは、更に少量なりとはいへ交通の不便は之が搬出に一年乃至一年半を要する等、將來森林鐵道の敷設せらるゝ等のことなくば、我國は滿洲材に對して多くを期待することを得ないであらう。然し吉會鐵道の完成は我國に吉林材供給上有利となるであらう。沿海州材又滿洲材と趣を同じくして居る點より、現在に於ては最も豊富で交通の便宜多き北米合衆國又はカナダ方面に依頼するの外はない。

將來の問題としては吾等は滿洲及西比利の林業助長策を講じ、或は投資に、勞力の供給に、伐採地よりの木材輸送を完全ならしむる施設に、河川沿岸より鐵道への輕便鐵道等の開設鐵道運賃の引下げ等に依つて、豊富なる極東森林資源の開發を行つて、始めて我國に對する關係を一變せしめ得るであらう。

### 八 衣服料の需給状態

衣服料中最も廣く又多く用ゐらるゝ綿製品たるべき原料棉花に就て内地の状態を見るに、我國に於ける栽培は年々減少の傾向にあり、明治三十年に四萬四千四百町歩あつたものが、同四十年には七千三百町歩になり、大正十年には更に二千三百町歩に減じ昭和二年には一千百四十二町歩。従つて其産額に於ても、明治三十年に實棉七百三十萬貫が、同四十年には百四十二萬貫、大正十年には五十九萬貫、昭和三年二十

一萬貫になつて居る。

最近三箇年間産額は左の如くである。

昭和	和	元	年	一、三一六
同	二	年	一、一四二	二五九、六三五
同	三	年	九七〇	二五四、四一一
				二一八、〇五二

一方其消費を見るに紡績業は我國に最も發達したる工業の一にして其發達程度は世界の驚異となつて居る。昭和二年末會社數六四、工場數二五七、鍾數六百十一萬鍾にして世界第七位ではあるが其棉花の消費量に於ては世界第一の英國と相伯仲し昭和元年下半年期の如きは一時之を凌駕した程である。昭和二年度英國は三、〇一〇千俵、一鍾當二六・五封度に對し日本は二、八五二千俵、一鍾當二二・九封度を消費してゐる。世界消費量の一割以上である。近年我國に於ける棉作が思はしからず棉花の自給を説く者も出で朝鮮に於てやゝ有望にして十五萬町歩、約三十萬俵の生産があるが此大消費に應ずべくも無く需要額の五%に過ぎず。従つて我國綿絲紡績業は殆んど外國産原料に依存して居る。輸入總額並に主要仕出國の數量を掲ぐれば次の如くである。

支	仕	出	地	昭和三年		昭和四年	
				數量	價格	數量	價格
				一、〇三二、五四七	四九、五九八	七八、〇三七	三、〇三八
							五九



英 領 印 度	四、六三、九二八	三三三、二六六	五、一三六、四六八	三三二、一〇八
北 米 合 衆 國	三、八七一、六〇〇	二四五、九三六	四、四八五、一四六	二七六、三五七
埃 及	一七五、七四四	一七、七三三	三三〇、八三七	二二、八九九
總 計	九、七五二、七三三	五四九、九四一	一〇、七九、五七一	五七三、〇二六

然らば棉花の供給に關して滿洲の地位如何、最近遼陽に滿洲紡績、金州に内外棉花、奉天に南滿洲紡績、奉天紡紗廠、鐵嶺に滿洲織布、福島紡績等が將に操業せんとし、滿洲に於ける棉作熱も勃興し來つたといへ、到底現在に於ては我國に對して貢獻し難いであらう。然し將來に於て棉作地として滿鐵農務課に於て調査せる處によれば、奉天省中生産地と見做し得べきは、現在大豆作地たる三十五萬町歩の内半、十七萬町歩であらうと。従つて滿洲に於ける棉花作付面積を約二十萬町歩と假定すれば、約三十三萬俵の生産を得。之も在滿紡績會社の原料として使用せらるゝ以上を出で難いであらう。

羊毛に就いても、前述の通り滿蒙品は品質粗悪で、毛織物として特殊のもの又は混ぜ物の外は使用し難く、毛織物として多くの種類の需要比較的少い我國に於ては遠く毛質改良後の將來を待たなければならぬのであらう。

我國の綿羊飼育及羊毛産出又不振にして國內需要に對しては全く無力、昭和三年末總頭數一萬九千四百九十五頭に過ぎず之を全部海外に仰いで居る。

試みに羊毛輸入の趨勢を見るに次の如くである。

仕 出 地	昭 和 三 年		昭 和 四 年	
	數 量	價 格	數 量	價 格
亞 爾 然 丁	一六、七三二	二、八三三	四、五八三	六三三
英 吉 利	六、三三九	一、四四七	四、〇九六	八六一
智 利	三、七九九	三三三	五、六〇二	五六八
濠 太 刺 利	八七、〇〇七	一〇五、二五四	七九三、一八一	九九、〇五九
其 他 諸 國	二六、八三八	一、九六五	七、四五七	六六四
總 計	八八〇、五九四	一一、八七三	八二四、九二九	一〇一、八二五

輸入數量も逐年増加の傾向を示し、總數量の九割以上は濠洲産毛である。

内地羊毛産出に就ても、我政府は毎年百萬圓を支出して綿羊飼育の奨励をなし大正十年より向ふ二十五箇年間に百萬頭に達せしめんと計畫を有してゐるが、本計畫完成後と雖、軍服、警官服の需要を満し得るのみであるといふ。此間にあつて滿蒙の羊毛は、如何に我國に供給せらるゝかといふに、支那羊毛と共に地理的に便宜なる地位にあるに係らず、其の品質劣等は一大障害をなして居る。従つて我國に於ける雜種羊毛消化の技術的進歩をはかると同時に、滿蒙羊毛改良に成功を期せねばならないのである。此處に滿



鐵が綿羊の改良に多額の犠牲を拂つて居る所以があるのであつて、其成功も將來に期せねばならない。棉花にしても羊毛にしても、現在に於ては滿蒙より日本としては多くを期待することを得ないのである。

### 九 我が燃料問題と滿蒙

我國の如き燃料資源の乏しい國では人口が都市に集中し、工業の發達が盛になればなる程燃料問題が喚起される。試みに三萬噸の船を造るには二萬噸の鋼材を要し、二萬噸の鋼材を造るには八萬噸の石炭を必要とするが如き、又自動車一臺の年所要石油は六石乃至十石といふ。従つて我國自動車總數三萬五千臺として之を運轉するに二十一萬石の石油を要し之のみにて我生産油の一三%に當るが如き、其他電燈、瓦斯、汽車汽船の燃料の如き之に應ずべき我國資源如何。吾國の石炭存在量は約八十億萬噸と稱せられるが經濟的採掘は今日の如き情態を以て採掘するものとすれば、三十年乃至六十年にて終ると稱せらる。即ち二十億乃至三十億萬噸以上は採掘し難いことになる。

左に石炭の産出輸出入及國內消費高を示せば次の如くである。

年	生産高	輸入高	輸出高	推定國內消費高
昭和二年	三、一九、七六七	二、六〇、五五六	二、二五、九四九	二七、七二、七四二

同	三	年	三、八四、五〇〇	二、七四、八一一	二、一五〇、四三三	二七、九三、五八八
同	四	年	三、九六、六六五	三、一〇、一三三	二、〇三、一三七	二八、九六、三九六

約年二千八百萬噸を消費しつゝありて、消費の増加は吾國に於て必然的で現在に於てはさきで過不足なきが如きも其供給不足を訴ふるは近き將來であらう。然るに朝鮮の石炭(出炭八十萬噸)樺太(出炭五十萬噸)は言ふに足らざるべく、臺灣は採掘可能炭四億萬噸と稱せられるも、現在百五十萬噸の出炭を見つゝあれど、臺灣自身の消費に充てられる外輸出用として望み少く、將來の採掘能力又著しき進歩を望み難く、所詮米國の五百分の一、英本國の三十分の一支那の百分の一しか埋藏量なき我國の石炭は饑饉に陥らざるを得ないであらう。

此點に於て滿洲炭、殊に撫順炭は、前項説けるが如く豊富なる供給力を有し、山東炭と共に將に日本の石炭問題に貢献する處あらむとするのである。

石油に至つては現在より以上の産出は困難なるべく、益々輸入に依頼しなければならぬ。試みに最近三箇年間に於ける生産消費を見るに次の如くである。

石油需給統計 (單位一噸は十ガロン約二斗)

種別	大正十四年	昭和元年	昭和二年
國産	六、〇四七、八四五	六、二二三、六六七	六、五一八、三三一



外油精製	五、七二〇、五五一	六、五六四、二三三	六、九二六、二四六
輸 入	九、六七〇、二六九	一一、二〇六、五〇四	一五、三〇〇、四四三
輸 出	一一〇、八七一	一一八、七七一	一六四、五三五
移 出	七八〇、二〇八	一、一三八、七七八	九〇四、一七四
合 計	二〇、五三七、五八六	二二、七二六、八五五	二七、六七六、三一〇

(臺灣、朝鮮及海軍輸入除外)

の如くにして、石油の缺乏は我國産業軍事上の一大缺陷である。

之れ又滿鐵會社が撫順の油母頁岩油採掘を計畫せる所以であつて年五萬噸の重油を産し得るに至つた、我國軍事産業上の一大缺陷を補ひ得るであらう。又其副産品たるパラフィンの生産は年六千噸にして内地需要額一萬二千噸の半額を占め従來外國より九千噸の輸入を見てゐた同品もほと自給自足の域に達し得た。石炭、石油の需給上より見て我國燃料問題に對し貢献する處のものは、確に我滿洲であることを信ずるのである。

一〇 結 び

衣食住料の内、我國は何を最も要求せるかを簡單ながら明にしたと思ふ。これに對して、滿洲は何の部分を貢献し得るかを考察して來たのであるが、要するに、食料品及食料生産上に滿洲の大豆、豆粕は偉大

なる期待を繼ぎ得べく、小麥、肉類は其將來を囑すべく、鹽は食用及工業用に現に我國に貢献する處多く、將來益々之に望み多かるべく、木材及棉花、羊毛の期待に副はざるものあるに反し、燃料としての撫順炭は我國に産業的發展の前途に光明を與ふるものと言はねばならぬ。更に石油の産出は、將來益々我國燃料問題解決の鍵たるべきである。

最後に現在我國に於て滿蒙資源を幾許所要して居るかを明にする爲に、南北滿洲の日本向輸出額（朝鮮臺灣も含む）の統計を掲げて本稿を結ぶ。

品 別	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和四年度滿洲 總輸出額に對し %
農 産 物	九六、八〇二、三八	三〇、一四三、七七	一一四、九〇九、六七	三三・八
工 産 物	六八、四〇三、七九	六七、〇〇四、三六	六〇、八六一、四八〇	四三・四
礦 産 物	四三、〇〇六、一六八	四八、八四〇、五六三	五三、九一九、一四〇	三三・三
畜 産 物	一九八、七〇	三、〇八五、一六八	四、〇五〇、二七六	二七・五
水 産 物	二、一三三、六八六	二、二八九、四六九	二、三四五、五八五	三九・八
林 産 物	六、三四八、八六三	六、六〇六、二九二	四、五二一、六八五	六九・五

更に之が品種別につき見るに次の如くである。

昭和四年度重要品南北滿洲輸移出額



品別	全滿總輸出額	同上百分率	日本向輸出額	全滿總輸出ニ對スル日本向百分率
大豆	一六五、四五九、五〇五	四〇・九	五五、三九三、〇二五	二二・四
石炭	六五、二八七、六八九	一六・一	三七、四二一、六七三	五七・三
豆油	三七、六二〇、六三三	九・三	二二、六二七、三〇〇	五七・五
粟	二一、五五七、二二一	五・三	六四、五三二	〇・三
高粱	一六、四三九、五八四	四・一	一五、五八三、二九四	九四・二
玉蜀黍	七、七二六、〇三六	一・九	二、三〇〇、二六四	二九・八
鐵及同製品	三、九〇五、二〇九	一・〇	一、九四二、九六四	四九・七
其他	七、三七一、三三七	一・八	六、五九五、七四七	八九・五
總計	七九、四一四、九〇一	一九・六	四〇、八五八、六二九	五一・四
	四〇四、七七一、〇九四	一〇〇・〇	一六二、七七七、四五七	四〇・〇

又之を滿洲よりの仕向國別に見るに左の如くである。

昭和四年度全滿洲輸出國別表

仕向國	輸出額	同上百分率
日本	一六八、八五八、八八六	三九・九
支那	九二、八四五、一七五	二二・〇

露西亞	北米	和蘭	英吉利	其他諸國	計
四一、二九九、七一〇	一〇、三八一、五七一	二九、七〇九、七八九	二一、六三七、八五三	五七、三八三、〇三六	四二二、一一六、〇二〇
九・八	二・五	七・〇	五・一	一三・七	一〇〇・〇

即ち滿洲總輸出額の約四割を日本國が需要し、大豆は其二割を豆粕及石炭の半數は日本向にして鐵類は九割以上が日本向になつてゐる。

翻つて日本が各國より輸入する金額上より見る時は、鑛產物及水產物の何れも二割以上の外案外小額である。之は一に滿洲より輸入するものが金屬の貴からざる品種を含むとはいへ、まだく滿蒙より供給を期待し得べきではあるまいか。



終

